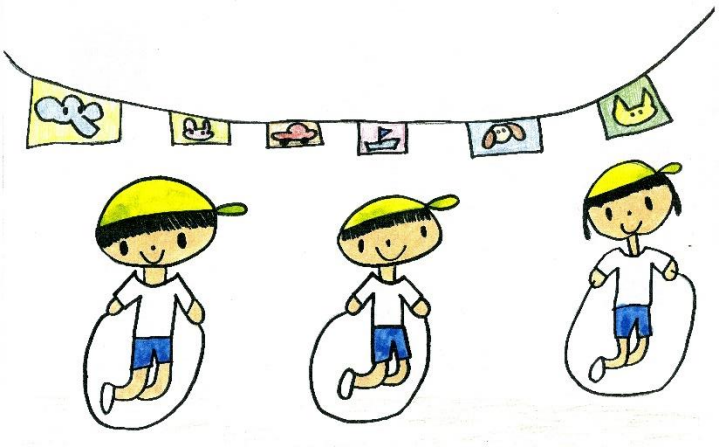
Ⅲ　令和４年度　幼稚園教育研究行事予定表

月	日	曜	時　間	行　事　名	場　所
4	26	火	14:00～16:30	新規採用教員研修会①	総教セ 382
5	19	木	14:00～16:30	新規採用教員研修会②	総合体育センター
6	1	水	13:30～16:30	中堅教諭等資質向上研修（11 年次） （開講式等）	総教セ 382 他
	8	水	9:30～12:00	新規採用教員研修会③　協力園研修１①	認定こども園 立正幼稚園
	9	木	9:30～12:00	新規採用教員研修会③　協力園研修１②	高岡第一学園 附属第三幼稚園
	22	水	15:00～16:30	幼稚園教育調査研究委員会①	総教セ 324
	29	水	14:00～16:30	新規採用教員研修会④	総教セ 382
	30	木	13:30～16:30	園長等運営管理協議会①	総教セ 382
7	5	火	9:30～16:30	保育技術協議会①	総教セ 382 他
8	2	火	13:30～16:30	富山県幼児教育研修会（兼第 36 回東海北陸国公立幼稚園・こども園教育研究協議会）	オンライン
	5	金	13:45～16:30	保育技術協議会②	総教セ 382
	10	水	14:00～16:30	中堅教諭等資質向上研修（11 年次） （幼稚園活動計画セミナー）	総教セ 332･333 他
	25	木	9:00～12:00	幼稚園教育課程研究協議会	オンライン
9	2	金	14:00～16:30	新規採用教員研修会⑤	呉羽青少年自然の家
	28	水	14:00～16:30	新規採用教員研修会⑥	総教セ 382 他
10	7	金	15:00～16:30	幼稚園教育調査研究委員会②	総教セ 214
	20	木	13:30～16:30	園長等運営管理協議会②	総教セ 382 他
	26	水	9:30～12:00	新規採用教員研修会⑦　協力園研修２	総教セ 382 他
11	22	火	13:30～16:30	中堅教諭等資質向上研修（11 年次） （閉講式等）	総教セ 382 他
	24	木	14:00～16:30	新規採用教員研修会⑧	総教セ 382
1	24	火	15:00～16:30	幼稚園教育調査研究委員会③	総教セ 214

Ⅳ　令和４年度　各幼稚園教育研究会一覧

研究大会 研究領域	研究主題 地区	開催月日
幼稚園教育課程研究協議会 ※ ＿＿は発表担当	〈共通協議主題〉 「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」における議論等を踏まえ、幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進について 私立（新川地区） 私立（西部地区） 〈分科会協議主題　１〉 「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」における議論等を踏まえ、幼児教育の質に関する認識の共有、家庭や地域との連携の在り方について 国公立	８/25（木） （オンライン開催）
全国国公立幼稚園・こども園長会 総会・研究大会	未来にはばたき 生き抜く力を育むための幼児教育の創造 ～今こそ考えよう 国公立幼稚園・こども園の果たすこと～	奈良県奈良市 ６/３（金）、４（土）
全国国公立幼稚園・こども園教育研究協議会	子どもの豊かな未来につなぐ 幼児教育の“今”を考える ～心いっぱい 体いっぱい 遊びこむ子どもを育てよう～	香川県高松市 ７/29(金)、30(土)
全日本私立幼稚園連合会・東海北陸地区私立幼稚園教育研究大会	新しい時代を伸びやかに生きる ～社会に開かれた質の高い幼児教育を～	愛知県名古屋市 7/28（木）、29（金）
全国国公立幼稚園・こども園 ＰＴＡ全国大会	見ちょる　聞いちょる　話しちょる 子供の明日　無限の未来 ～親子の絆が　”ふく”　を呼ぶ～	山口県下関市 ８/５(金)、６(土)

領域「環境」について



領域「環境」に関する事例を、三つの「ねらい」からまとめ、紹介します。

Ⅰ　領域「環境」の考え方

１　身近な環境との関わりに関する領域「環境」とは

幼児は周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって主体的に関わり、自分の遊びや生活に取り入れていくことを通して発達していく。このため、教師は、幼児が周囲の様々な環境に関わり、豊かな体験ができるよう、意図的、計画的に環境を構成することが大切である。

この領域では、「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」ことをねらいとしている。

２　「環境」の領域で育てたい幼児の姿と援助

幼児は身近な環境に興味をもつと、親しみをもって自ら関わるようになる。また、園内外の身近な自然に触れて遊ぶ機会が増えてくると、その大きさ、美しさ、不思議さに心を動かされ、それらを利用して遊びを楽しむようになる。このような遊びを繰り返し、様々な事象に興味や関心をもつように援助していくことが大切である。

また、幼児は、身近な環境に好奇心をもって関わる中で、新たな発見をしたり、どうすればもっと面白くなるかを考えたりする。そして、体験したことを、更に違う形や場面で活用しようとし、新たな使い方を見付けることもある。すると、幼児にとっての生活である遊びの中で、環境の一つ一つがもつ意味が広がる。そのためには、まず環境に対して、親しみ、興味をもって積極的に関わるように援助することが大切である。さらに、ただ単に環境の中にあるものを利用するだけではなく、そこで気付いたり、発見したりしようとする態度を育てるよう援助することも大切である。それは、幼児は、気付いたり、発見したりすることを面白く思い、別なところでも活用しようとすることにもつながるからである。

さらに、身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字等に対しての関わりを広げることも大切である。幼児を取り巻く生活には、数量や文字に触れ、理解する手掛かりが豊富に存在している。正確な知識を獲得することを目的とするのではなく、環境の中でそれぞれの働きを実感できるように援助することが重要である。

３　周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養うために

（１）遊びの中で周囲の環境と関わり、自分なりに考えたり、自分の考えをよりよいものにしようとしたりする気持ちが育つようにする

幼児は、遊びを通して周りの環境に関わる。教師は、環境の中にあるものの特性を生かし、その環境から幼児の興味や関心を引き出すことができるような状況をつくらなければならない。幼児が扱いやすい遊具や用具、物を用意するだけでなく、幼児の能動性を引き出す自由な空間や物を配置したり、幼児がどうしてよいか分からないときなどに教師が援助したりすることも大切になる。

また、自分とは違った考え方をする友達が試行錯誤している姿を見たり、その考えを聞いたり、友達と一緒に試したり工夫したりする中で、幼児は、新しい考えを生み出す。このような体験を通して、幼児は考えることの楽しさや喜びに気付き、自分の考えをよりよいものにしようとする気持ちが育っていく。そのため、教師は、幼児が自分なりに環境に関わる姿を大切にするとともに、場やものの配置を工夫したり、教師も一緒にやってみたりして、幼児が互いの考えに触れることができるような環境の構成を工夫することが必要である。

（２） 幼児にとっての自然のもつ意味を踏まえ、自然との関わりを深めることができるようにする

自然との出会いは、豊かな感情や好奇心を育み、思考力や表現力の基礎を形成する重要な役割をもっている。そこで、教師は自ら感性を豊かに保ち、自然とその変化のすばらしさに感動することや、幼児が示すささやかな自然への関わりにも共感していくことが大切になる。また幼児にとっての心の安定、不思議、喜び、好奇心、探究心などを生み出すような自然との出会いが生まれる環境を工夫することが大切である。

（３）自分から関わろうとする意欲を育てるとともに、身近な事象や動植物に対する親しみや畏敬の念、生命を大切にする気持ち、公共心、探究心等が養われるようにする

身近にある様々なものに対して積極的に関わろうとする態度は、身近な事物や出来事や自然等に対して幼児が思わず感動を覚え、もっと関わりたいと思う経験をすることから生まれる。また、幼児は、共に遊んだり、世話をしたりするなどの様々な身近な動植物等との関わりを通して、命あるものに対して、親しみや畏敬の念を感じる。そして、友達と植物等の世話をすることにより、皆と一緒に育てたから大切にしなければならないといった気持ちももつようになる。さらに植物が生長する姿を通して、探究心がわいてくることもある。

教師は、このような様々な気持ちを引き起こすような豊かな環境の構成と、身近な事象や動植物との関わりを深めるような援助をすることが重要である。

（４）社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えが養われるようにする

幼児は、地域の人々とのつながりを深め、身近な文化や伝統に親しむ中で、自分を取り巻く生活の有り様に気付き、社会とのつながりの意識や国際理解の意識が芽生えていく。

生活の中で我が国の伝統的な行事に参加する、国歌を聞くなどして自然に親しみを感じるようになり、唱歌やわらべうたの楽しさを味わい、我が国の伝統的な遊びをする、様々な国や地域の食に触れるなど、異なる文化に触れることを通じて、文化や伝統に親しみをもつようになる。幼児期にこのような体験をすることは、将来の国民としての情操や意識の芽生えを培う上で大切である。なお、このような活動を行う際には、文化や伝統に関係する地域の人材、資料館や博物館等との連携・協力を通して、異なる文化にも触れながら幼児の体験が豊かになることが重要である。

（５） 日常生活の中で、幼児自身の必要感に基づく体験を大切にし、数量や文字等に関する興味や関心、感覚が養われるようにする

幼児にとっては、数字や文字等に親しんだり、物を数えたり、絵本等にある文字表現に関心を抱いたりすることは、日常的なことである。その上で、幼児の遊びや生活の中で文字を使ったり、数量を扱ったりする活動が生まれることがあり、そのような活動を積み重ねることで数量や文字に関わる力が伸びていく。

幼児期に大切にしたいことは、幼児が興味や関心を十分に広げ、数量や文字に関わる感覚を豊かにできるようにすることである。このような感覚が、小学校における数量や文字の学習にとって生きた基盤となる。

《参考文献》「幼稚園教育要領解説」平成 30 年３月　文部科学省

Ⅱ　日常の実践事例

周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。

【ねらい】

（１）身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。

（２）　身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。

（３）　身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

【内容】

（１）　自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。

（２）　生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。

（３）　季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。

（４）　自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。

（５）　身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。

（６）　日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。

（７）　身近な物を大切にする。

（８）　身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。

（９）　日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。

(10)　日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。

(11)　生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。

(12)　幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。

１　ねらい（１）について

（事例１）　３歳児「枯れた葉っぱ入れてあげるといいんだって」

―　生き物と触れ合うことで、生き物への興味・関心を高めた事例　―

Ａ児は園庭に出るといつも教師に、「プランターを動かして欲しい」と伝える。Ａ児は、生き物が大好きで、自ら関わろうとしているようだ。

Ａ児が見付けた生き物はできるだけ保育室で飼育するようにした。Ａ児が生き物に触れたり話しかけたりしてかわいがる様子を見て、生き物に興味のなかった友達や苦手意識をもっていた友達も生き物に触れることができるようになったり、気付いたことを友達同士で伝え合ったりする姿が見られるようになった。

また、飼育ケースは子供の見やすい高さのテーブルに置き、隣に虫メガネや関係性のある絵本等を置くなど、子供たちが生き物に興味をもつように環境を工夫した。また、教師が「名前、つけてあげようか」などと言葉をかけることで「女の子かな」「赤ちゃんかもしれないね」などと、子供同士の会話も盛り上がった。

さらには、興味をもった年長児が図鑑を持ってきて、飼育ケースを見ていると、Ａ児が「この子女の子なのかな」とたずねた。年長児が図鑑の拡大ページを見せながら「ほら、これと一緒。背中に模様があるから女の子だよ」と教えてくれる姿も見られた。

２学期になると、Ａ児は、ダンゴムシに話しかけながら、「枯れた葉っぱ入れてあげるといいんだって」と、年長児から教えてもらった飼育方法を友達に伝えたり、友達と一緒に虫かごに入れるための石や落ち葉を探したりするようになった。

教師は、Ａ児の生き物への興味や思いを大切にしようと考え、Ａ児が生き物と十分触れ合うことができるように援助した。また、Ａ児の生き物への興味を他の子供たちにも伝えたいと思い、保育室で飼育するようにした。さらに、Ａ児が生き物を発見した時の喜びや感動を見逃さずに、友達と共有できるようにしたことで、子供同士の関わりが深まった。

Ａ児は年長児との関わりから、年長児を真似て図鑑を使うようになったり、困ったことを年長児に相談しようとしたりするようになった。少人数園であることの特長を生かして、年長児との関わりをもつことが、Ａ児の成長を促したと言える。

Ａ児の生き物への興味・関心を大切にし、直接触れる機会や環境の構成を大切に援助したことで、Ａ児が「ダンゴムシを見付けたい、世話をしたい」という思いをもったり、友達や異年齢児との関わりが深まったりし、園生活が楽しいものとなっていったと考える。

（事例２）　３歳児「ゼリーの形になったよ」

―　願いをもち、繰り返し試す中で、水や砂の性質に気付いた事例　―

５月に入り暖かくなってきた頃、教師は、子供たちと一緒に砂遊びをした。

「先生、ゼリー作るから見ていて」とA児は得意そうにゼリーの型に砂を入れ始めたが、砂はうまく固まらず、崩れた。A児が不思議そうな顔をしていたので、教師が「白い砂だとおいしいゼリーは作れないみたいだよ。黒い砂に変身させてあげて」と助言した。A児は、周りの子供たちが水を使用している姿を見て、バケツに水を汲んできた。そして、バケツの水の中に砂を入れていったが、水の分量の方が多いため、砂はなかなか固まらなかった。どんどん砂を入れていくが、A児の思いどおりの砂にはならない。そのうち、バケツがひっくり返ってしまい、水がこぼれた。A児がバケツを持ち上げると、そこには黒い砂ができていた。A児が、偶然できたその黒い砂をゼリーの型に入れてひっくり返すと、きれいな形のゼリーができた。「先生、黒黒ゼリーできた！」と嬉しそうに教師に教えてくれた。

その後A児は、いくつもゼリーを作って遊んだ。黒い砂で作ったり白い砂で作ったりを何度も繰り返していた。黒い砂が無くなると、バケツに水を汲んできて、砂に水をかけて黒い砂を作った。固まりにくいときは、周りにある白い砂も少し加えて混ぜるなどしてゼリー作りに適した砂にしていた。

砂が固まらないことを不思議に感じたA児に、今まで水を使って砂を濡らしていたことを教えず、自分で気付くような言葉がけを行った。水を使用することには気付いたA児であるが、バケツの水に砂を入れても水が多すぎて全く固まらずにいたところで、バケツをひっくり返したことで、型抜きしやすい砂を見付けることができた。

A児は、何度もゼリー作りをして遊ぶ中で、砂が固まるのにほどよい水の分量に気付くことができ、水や砂の性質に興味や関心をもったのではないかと考える。教師は、全て教えるのではなく、子供が遊びの中で興味や関心をもち、自分で気付くよう援助することが大切である。

（事例３）　３歳児「オタマジャクシ、手で捕まえられるようになったよ」

―　オタマジャクシとの触れ合いを通してオタマジャクシの住む環境にも興味が向いた事例　―

５月中旬、園舎裏にある田んぼへオタマジャクシすくいに出掛けた。教師はオタマジャクシを手ですくって見せたが、A児は怖くて手で触れず、持ってきた柄杓を使って捕まえた。みんなが捕まえたオタマジャクシはクラスで飼育することになった。その後、A児は教師と水槽の水替え用の水を汲みに田んぼへ通い、柄杓でのオタマジャクシすくいを楽しむようになった。オタマジャクシが素早く逃げてしまうことから、「ぼくには、（手ですくうことは）難しい」と話していた。

６月に入った頃、大きなたらいに水位を下げてオタマジャクシを入れ、オタマジャクシと触れ合えるようにした。年長児たちが自慢げに手ですくっているのを見たA児が「Aちゃんもやってみたい」と言い、震える手で何度もチャレンジし、ついに捕まえることができた。

その後、梅雨の晴れ間に田んぼに水汲みに行った時、「Aちゃん、オタマジャクシ、手で捕まえられるようになったよ」と言い、田んぼの水に手を入れた。そして、「先生、（水が）温かいね」「気持ちいいね」と嬉しそうに水に手をつけていた。教師が、「気持ちいいね。どうして温かいんだろうね」と問いかけると、A児はしばらく考えて「『夏』、だからかな」と言った。教師は、「そうか、夏だからだね」と受け止めた。

A児はこれまで生き物と触れ合う経験が少なく、田んぼへ行くことも初めての経験だった。教師は、田んぼにいる生き物と触れ合うことを通して、稲・水・泥等にも興味をもってほしいという願いから自らオタマジャクシすくいを楽しむ姿を見せてきたが、A児は怖がって水に手を入れることができなかった。また、自分には難しいと思っていることも分かったので、ここで無理に挑戦させることはしないでおこうと考えた。

A児が、オタマジャクシの世話を通して愛着がわき、大好きになった頃合いをみて、教師はオタマジャクシと触れ合える場を設定した。A児は、年長児や友達がオタマジャクシと触れ合っている姿に「やってみよう」という気持ちになり、何度も挑戦して、オタマジャクシを捕まえられるようになった。このことから、自分にもできるという自信をつけていった。

この自信が、オタマジャクシが住んでいる田んぼの水に自分から手を入れることにつながった。そして、水温の変化にも気付くことになった。

生き物に親しむ体験ができるように、ある程度の期間の見通しをもって機会をつくったり環境を整えたりしていくことが大切である。またその間、教師は、子供の思いや願いを受け止め、変容を感じ取りながら、問いかけたり共感したりして関わることも大切である。

２　ねらい（２）について

（事例１）　４歳児「手が紫色になっちゃった」

―　遊びの中での気付きから、自然物を取り入れた遊びに夢中になった事例　―

Ａ児は園庭に落ちていたブルーベリーの実を触っていたところ、「手が紫色になっちゃった」と驚いていた。その後、近くにいたＢ児やＣ児と、潰れたブルーベリーの実を水の入ったカップに入れ、透明な水が色水になることに気付いた。「もっと集めよう」「他の物を入れても色が出るのかな」と三人で話しながら色水を作った。Ａ児はテーブルの上にすり鉢があるのを見付け、三人はシロツメクサの葉やタンポポ等をすり潰し始めた。三人は水を混ぜながら、「きれいだね」「ジュースできたよ」と言いながらジュースづくりを楽しんでいるうちに「水をたくさん入れたら、薄い色になったよ」「ペットボトルに入れて振っただけでもジュースができたよ」などと、様々な色水づくりの方法を見付け、試していた。

教師は、自然物を使用した色水づくりを想定し、子供の実態に応じた用具を準備した。

Ａ児がすり鉢を遊びに取り入れたことがきっかけとなり、「面白そう」「もっとやってみたい」と他の子供も興味をもち、遊びが広がったと思われる。さらに、遊びながら自分で様々なことを試したり見付けたりできたことで、身の回りの自然物を使っての遊びに夢中になっていったと考える。

（事例２）　４歳児「コーヒー屋さんをしようよ」

―　自然物を取り入れ、友達とやり取りを楽しむごっこ遊びへと発展した事例　―

Ａ児、Ｂ児、Ｃ児の三人がバケツで水を運び、泥遊びをしていた。テーブルの横にコップやペットボトル、ろうと、マドラー等の用具が置いてあることに気付いたＡ児が、「これ、使えそう」と言って、友達のところにかけ寄った。「いいね」とＢ児とＣ児が賛同し、三人は次々と用具をテーブルの上に運び、今度は飲み物をつくり始めた。Ａ児がペットボトルの中に砂と水を入れて、マドラーでかき混ぜ、コップに注いだところ、Ｃ児が「コーヒーみたい」と喜んだ。教師が白い色水を入れた牛乳パックをテーブルの近くにそっと置いたところ、それを見付けたＡ児が「コーヒーにこの牛乳を入れよう」と言って、注ぎ始めた。「すごい、本物みたい」と喜ぶＢ児の声を聞き、近くにいた多くの子供たちがＢ児の周りに集まってきた。「少し分けてあげるよ」「コーヒー屋さんをしようよ」「ストローと、もっとたくさんのコップがほしいな」という三人の声をきっかけに、クラス全員が集まってきて、コーヒー屋さんを開店することになった。

教師は、泥遊びを楽しむ子供の姿を捉え、泥や水といった身近な自然に関わりながら遊びを工夫し、友達との関わりを深めることができるようにしたいと考えた。

教師の意図的な場の工夫が、遊びに必要な用具を選択し、遊びに取り入れ、自ら工夫して遊ぶ、子供の主体的な姿につながったと思われる。また、子供が見立て遊びを楽しむ中に教師が新しい材料を提供したことで、興味をもった子供たちが集まり、遊びが広がり、充実していった。身の回りの自然を遊びに取り入れながら子供の思いや願いを踏まえ、遊びが深まるような援助が大切だと考える。

（事例３）　４歳児「ダンゴムシがすりむかないように」

―　子供の思いを引き出すことで、友達と一緒に生き物にとって心地よい住みかを作ろうとした事例　―

４歳児が園庭でダンゴムシを捕まえて虫かごに入れていた。虫かごに入れたままにしていたダンゴムシは、翌日、虫かごの中で死んでいた。その様子に気付いたA児たちが集まってきて「お腹すいたのかな」「遊ぶところなかったからかな」と心配そうに話していた。

数日後、A児が二人の友達と一緒にダンゴムシを捕まえて、虫かごに入れていた。しばらく集めることに夢中になっていたが、A児がふと「これがいい」と言いながら、表面が滑らかな石を虫かごに入れ始めた。「なぜ石を入れてるの」と教師が声をかけると、A児は表面がざらざらした石を見せながら「ダンゴムシは石が好きなんだよ。でも、こういう石だと登る時にすりむくからね」と答えた。教師が「A君、虫に詳しいね。ダンゴムシが喜ぶね」と感心して言うと、「家でカメとメダカを飼ってるから、いろいろ知っているよ」と、A児は笑顔で話した。側で話を聞いていた二人も一緒になって、「これはどうかな」とA児に尋ねながら、表面が滑らかな石を虫かごに入れ始めた。その後も、三人で相談しながら砂や草を虫かごに入れていった。

子供たちは初めは「ダンゴムシを捕まえたい」という自分の興味のままに遊んでいたが、ダンゴムシの死と向き合うことで「どうすればよかったのだろう」とそれぞれに考えていた。しかし、具体的な方法を考え、行動に移すまでには至らなかった。

一方、A児はダンゴムシの過ごしやすい環境を作っており、「ダンゴムシを大切にしたい」というA児の思いが感じられる。A児は家庭でいろいろな生き物を飼育しており、飼育方法をよく知っているため、ダンゴムシにとって過ごしやすい環境づくりをしたいと考えたのだろう。教師がA児のそのような思いを引き出したことで、側にいた友達も、ダンゴムシが元気に過ごすためには、その住みかである虫かごの環境をダンゴムシに適したものに整えることが大切だと気付き、一緒にやってみようとすることに結びついたと考える。

教師は日々の遊びの中で子供の着眼点のよさを捉え、周りの子供にも広めるように働きかけることが大切である。

（事例４）　５歳児「玩具を大切にしたい」

―　機会を捉えみんなで話し合うことで、玩具を大切にする気持ちを高めた事例　―

進級し、子供たちが新しいクラスの雰囲気に慣れてきた頃、遊びに使った遊具や道具の片付けを始めていたところ、A児が困った表情で壊れたブロックを教師に見せに来た。他の子供も割れたブロックを手に持って、教師の周りに集まってきた。教師はブロックがいつ、なぜ壊れてしまったのか尋ねたが、多くの子供が答えられず戸惑っていた。そこで、みんなで使うものについて、クラス全体で話合う場を設けた。

クラスには、ブロックが壊れていることに気付いていない子供もいたため、まずは、ブロックを一つずつ取り出して、壊れているものと壊れていないものの違いが分かるように確認した。

その後、みんなで使う玩具が壊れたことについて振り返ったところ、壊れた玩具を見つけた時にどうすればよいかや、玩具を大切にする理由等について子供たちはそれぞれに話し始めた。「壊れた玩具でけがをすると危ないから、見付けたらすぐに先生に知らせる」「次に使いたい人が使えなくなったら困るから、玩具を大切に使う」などの意見が次々と出された。友達の意見を聞いていたA児も、「玩具があるから、楽しく遊べる。だから、玩具を大事にしたい」と発言した。教師は、うなずきながら、子供たちの意見を受け止めた。

本事例は、教師が意図したわけでなく、偶然に起こった出来事であったが、年長児になり、互いのことを知り合うようになってきた時期だったので、この出来事について深く考えることができると思い、話合いの場を設けた。

子供たちは、安全で楽しい遊び方や物を大切にすることについては、日頃あまり意識していなかったが、自分に関係のあることとして考える機会となった。

年長児になると、今回のような話合いの場をもつことで、友達の意見を聞いて気付いたり、思いを強くしたりすることがある。今後も、こうした機会を大切にし、子供たちの成長を支えていきたい。

また、玩具の消毒や点検を定期的に行っていたものの、壊れた玩具があることに教師が気付いていなかった。玩具の点検の頻度について見直す等、教師側も配慮していきたい。

（事例５）　５歳児「ドングリ転がしゲームをつくろう」

―　身近な物を遊びに取り入れ、自分たちの願う遊び場にしたいと、試したり工夫したりした事例　―

幼稚園のグラウンドでドングリを拾ったことをきっかけに、「ドングリ転がしゲーム」をつくることになった。教師は材料置き場の中に、ドングリ転がしに使えそうな牛乳パックを多く入れておいた。するとＡ児は空き箱の中から牛乳パックを選んできて「たくさん牛乳パックあったよ」とＢ児に言った。Ｂ児は「いいね。切ってくっつけよう」と牛乳パックを縦半分に切った。二人は、牛乳パックを何個か切り終えると「スタートどこにしようか」「ここにしようよ」と会話しながら、切った牛乳パックを段ボールにセロハンテープで付けていく。するとＣ児が「グラグラしてすぐに壊れる」と伝えた。Ａ児が「本当だ。どうしたらいいのかな」と言ってしばらく考えた後「じゃあガムテープで付けてみよう」と思い付き、ガムテープで付け始めた。教師が「どう。うまく付けられたかな」と声をかけると、Ａ児は「うん。これで壊れないよ」と答えた。その後も、「Ｂちゃん、ここ少し押さえてて」と伝えるなど、Ａ児とＢ児は力を合わせて牛乳パックを段ボールに貼っていった。

子供たちは、ドングリが転がる斜面になるように牛乳パックをつなげてコースを作っていた。途中までコースが完成したところで、Ａ児が「じゃあ、ドングリ転がしてみよう」とドングリを転がすとコースから外れて落ちてしまった。Ｂ児は「ドングリ落ちてしまうね。どうしてだろう」と言った。教師は、「もう１回ドングリ転がして見てみよう」と提案し、ドングリが転がる様子をみんなで見た。すると、やはりドングリはコースから外れて落ちてしまった。ドングリの転がる様子を見ていたＢ児が「ここが急すぎるからドングリが落ちてしまうんだ」と気付いた。それを受けてＡ児が「じゃあここを、ドングリが落ちないようにしよう」とコースをなだらかにした。再びドングリを転がすと、コースから外れずゴールまで転がすことができた。Ｂ児が「やった。ドングリがゴールまで行ったね」と嬉しそうに言うと、Ａ児もうなづいた。

教師が、幼児が自分の作りたい物をつくれるように材料を多めに準備し、子供たちの様子を見守ったことで、ドングリ転がしに適した牛乳パックを選び、しっかり付けるのに適した接着剤を考え、自分たちでコースづくりを進めることができたと考える。

教師は、なぜドングリがコースから落ちてしまうのか、子供たち自身で気付けるように、もう一度よく見る機会を設け、どうしてドングリが落ちてしまうのか考えられるように声をかけた。すると、子供たちは斜面が急過ぎることに気付き、工夫したと思われる。

子供が自分で考えたり試したりするよう見守る教師の姿勢が大切である。そして、タイミングをみて気付きを促すよう声をかけるなどの援助をすることも大切である。

３　ねらい（３）について

（事例１）　５歳児「ナスが１番や」

―　野菜の栽培、収穫を通して、数量への興味や関心を高めた事例　―

５月に子供たちとナスやピーマンを植え、水やりをして世話をしてきた。野菜が実ると、子供たちは、いくつ実ったか、数えることに興味をもち始めた。教師は、グラフを作成して廊下に掲示し、子供たちと一緒に毎日収獲した野菜の数と同数の丸いシールを貼っていった。

そんなある日、子供たちは畑でたくさんのナスとピーマンを収穫し、一つのかごに入れて持ってきた。A 児は、かごから野菜を出して、「１、２、３･･･」と数え始めた。その隣で、B 児も数え始めた。すると A 児が「一緒に数えたら、何個か分からない」と言った。教師は「どうしたらいいかな。今日はたくさん収穫したから大変だね。」と声をかけ見守ることにした。

そばにいた C 児が「ナスとピーマンを分けて数えよう」と提案した。そこで A 児、B 児、C 児はまずナスとピーマンに分けた。A 児が「ピーマンから数えるよ」と言い、三人で声を揃えて「１、２、３･･･10 個だ」と数えながら並べた。

ピーマンを数え終えると C 児は、紙と鉛筆を持ってきて「10」と紙に書いた。教師は「それいい考えだね」と声をかけると、C 児はにっこり笑った。次にナスを数え始める。「１、２、３･･･37 個だ」と数え、C 児は「37」と書いた。B 児は、紙に書いてある数字を比べて、「ナスが一番や」と大きな声で言った。

子供たちは、C 児が書いた紙を見て、収穫した野菜の数の分のシールをグラフに貼った。

教師は、子供たちに、野菜の生長に関心をもち命あるものを大切にする気持ちをもってほしい、収穫の時期には実の数を数えることで、数量への関心をもってほしい、というねらいをもって、栽培活動を行ってきた。

収穫した二種類の野菜が混ざって、それぞれの数を数えることが難しい場面では、教師は子供たち自身で考えられるように声をかけ見守った。子供たちの疑問や困難に対して、教師がすぐに答えを出すのではなく、自分たちで考えてやってみようとする意欲をもつことができるように援助することが大切である。

C 児は、同じ野菜の集まりをつくり、数を数えるとよいことに気付いた。また、紙に数を書いておけばよいことも考えた。教師が C 児の考えを認めたことで、自分の考えた方法に自信をもったと思われる。

紙と鉛筆を持ってきて数字を書いた C 児の姿や、１０と３７の数字を見て大小を比べていたB児の姿から、数量に興味・関心をもっていると感じた。

子供たちが、普段の生活の中で、数えたり比べたりする体験ができるように、意図的に遊びや生活の中に取り入れたり、環境を工夫したりしていきたい。また、子供の気付きや考えのよさを認めていきたい。そうすることで、数量への興味や関心がさらに高まると考える。

（事例２）４歳児「これ、『お』」

―　ヒマワリカレンダーを通して、文字への関心をもった事例　―

保育室内に、子供たちが育てているヒマワリの成長を綴ったヒマワリカレンダーを掲示することにした。ヒマワリカレンダーには、種植え、芽が出た時、本葉が出た時、花が咲いた時などの折に触れてヒマワリと一緒に撮った子供の写真と、「おおきくなってね」「きれいにさいてね」などその時のヒマワリへの子供の思いを教師が聞き取って、吹き出しに書いて掲示した。教師が吹き出しに文字を書いていると、A児は興味深そうに見たり、「これ、『お』かな」と尋ねたりする。教師は「そう、これは、『お』」と応じると、A児は、にこにこしながら教師が書き終えるまで見ていた。

新しい写真と吹き出しが加わることを心待ちにしている子供たちは、降園時に迎えに来た家族にも見てもらい、吹き出しに書いてある言葉を読んでもらっていた。文字となった自分の言葉を見つめながら、家族の読むのを真似て、熱心に読もうとしている様子や、自分のヒマワリカレンダーだけではなく友達のカレンダーにも興味をもち、何と書いてあるのか尋ねている様子も見られた。

子供たちは、毎日ヒマワリに水やりをしたり草むしりをしたりして、大切に世話を続けていた。教師は、ヒマワリの成長とヒマワリへの思いを写真と吹き出しで掲示してすることで、ヒマワリへの関心がより高くなると考え、ヒマワリカレンダーを掲示した。

教師が吹き出しを書いていた場面で、自分が発した言葉が文字で表されることに興味を示したA児には、その興味を大切にした関わりを心掛けた。

ヒマワリカレンダーを見たり読もうとしたりしている子供の姿から、子供の生活の中に、子供自身が、文字が誰かに何かを伝えるためのツールであることに気付いていく場面があるということに気付かされた。今後も、文字が身近な人とつながる手段と感じたり関心をもったりすることができるよう、子供の発達や興味に沿って援助していきたい。

（事例３）　４歳児「自分の好きな国旗を作りたい」

－　オリンピックの開催をきっかけに興味をもった世界の国や国旗を、遊びに取り入れた事例　－

今年は、「2020 東京オリンピック」が開催され、子供たちがよく話題にしていた。中国出身のＡ児の「僕の国は中国だよ」「中国って強いよ」の言葉に子供たちは興味を示し、「先生、中国って何」とたずねてきた。Ｂ児がクラスに置いてある国旗の絵本で、中国を探し始めた。Ｃ児も中国出身であり、Ｂ児の横から嬉しそうに自分の国の国旗を指差した。

次の日、教師が準備した国旗の絵合わせカードや教師手作りの国旗カード（国旗の裏に世界地図）を見付けると友達と一緒に絵合わせをしたり、国当てゲームをしたりして楽しむ姿がみられた。図書館で国旗の絵本を借りてくる子供もいた。バングラデシュ出身のＤ児やパキスタン出身のＥ児は、日本語でのコミュニケーションが難しかったが、友達の様子を見て「みんなと同じ遊びを楽しみたい」という気持ちが芽生えたようで遊びに加わった。遊んでいくうちに、それぞれのお気に入りの国旗ができたり、友達の生まれた国がどこにあるかに興味をもったりしていた。

Ｄ児が「これ見て」とバングラデシュと日本の国旗を並べ、似ていることをＢ児にうれしそうに伝えた。Ｂ児は「フランスとオランダも」と形や色が似ている国旗があることに気付き、顔を見合わせて笑い合った。教師は、より国旗に親しみ、みんなで楽しめるようにゲーム形式の遊びを取り入れた。国旗取りゲームでは、どちらがたくさんの国旗を知っているかチーム対抗で楽しんだ。子供たちの遊びは日に日に盛り上がり、国旗当てゲームを運動会の競技に取り入れることとなった。さらに「自分の好きな国旗を作りたい」と国旗づくりへと展開していった。

４歳児クラスには、日本のほかに中国、バングラデシュ、パキスタンと合計４か国出身の子供がいる。言葉や習慣の違いから、コミュニケーションをとることが難しく、子供同士のトラブルが多かった。教師が「世界にはいろいろな国があることを知り、互いを思いやる気持ちをもってほしい」と願っていた時に、今回のオリンピック開催で、子供たちが世界の国への興味・関心をもち、子供同士でオリンピックに関する情報を伝え合っていることを感じた。そこで、この機会を逃さず、子供が楽しみ、友達との関わりをもつことができる国旗カードやゲーム形式の遊びを取り入れることにした。子供たちは、遊びの中で互いの国や国旗に興味をもち、発見したり考えたりすることで、友達同士のつながりも広がっていった。

教師が子供の興味を把握し、遊びが広がっていくような環境をタイミングよく設定したことによって、知っている情報を伝え合いながら遊びが継続し、友達の生まれた国の理解にもつながった。